

「浙学」の呼称とその系譜

銭 明 著
久米 裕子 訳

要 旨

本稿は、2006年12月9日、本学で開かれた寧波学術班主催講演会「浙東思想史再考」において発表された銭明氏の講演原稿「“浙学”的称呼与流脉」(未発表稿)の翻訳である。著者は、1956年杭州市生まれ。陽明学研究者として日中両国において知られ、現在は浙江国際陽明学研究中心主任研究員、中国計量学院人文学院教授、杭州師範大学教授である。

「浙学」に関する明確な定義が生まれたのは、民国以降のことで、それ以前の「浙学」の概念は、浙江地方のどの地域の思潮を指すのか、またどの時代の思潮を指すのか、その指し示す内容が各時代によって異なる。第一章では、宋代から現代に至るまでの「浙学」という呼称の用いられ方について考察が加えられている。特に明代の劉鱗長に注目し、これを黄宗羲・全祖望ひいては章学誠と比較することで、劉鱗長が主張する「浙学」の概念を特徴づけている。また第二章では、「浙学」は宋代に成立して以降、繁栄に向かい、明清時代に最盛期を迎えたとし、「浙学」をめぐる系譜とそれぞれの学問的特色について議論を進めている。その議論は多岐にわたるが、特に宋代以来の浙東の豊富な文化土壌の中から生まれた陽明学が、同じ心学の系統に属す湛甘泉の学とともに、浙東と浙西の両地域において、それぞれどのように展開していったかについて、詳細に述べられている。

なお本稿末の注は著者による原注であり、本文中の「 」も原文の引用符号をそのまま置き換えたものである。これに対し、本文中の“ ”は訳者が加えたもので、このほか書き下し文において、()に言葉の説明を、[]に言葉の補いを行っている。

キーワード：浙学、浙東地方、史学、心学、陽明学

一、「浙学」の呼称について

「浙学」の語は、古くは朱熹が南宋の浙東の事功の学を批判するために提出した否定的な意味合いをもつ学術的呼称であるが、このような批判を受けたのは当時の浙江の学者が総じて一派を立てるという自覚に欠けていたためであり、「浙学」はその学問上の理論においてもその学脈においても、濂・洛・関・閩の学や江西の諸学がもつような緻密で完全な独自の体系に及ばなかった。こうした評価は、学界の通説でもあり、またこのことは当時のそしてその後の学者が、南宋の学術に言及する際に、「浙学」をほとんどあるいは全く話題にしない原因の一つでもある。一方、この「浙学」という呼称の定義について言えば、「浙学」は、南宋以来、さまざまな呼び名があるものの、常に両宋、とりわけ南宋の浙東地方に限定されてきたことは、紛れもない事実である。ただし明代以後になると、「浙学」という言葉を取り巻く環境に変化が起り、その

ことによってその概念上にもしだいに多義的な傾向が現れてくる。

明代の劉鱗長¹⁾が浙江提学副使に任じられた際に編纂した『浙学宗伝』(不分卷, 浙江省図書館蔵, 明崇禎11年自刻本)は, 周汝登が撰した『聖学宗伝』の後を継ぐとともに, 自身が以前, 編集した『閩学宗伝』と対比させることを目的に編纂されたものである。劉鱗長の見解によれば, 「浙学」は朱子学の伝統をもつ閩学と共通の学術的淵源を有する孔孟の聖学の支流であり, その学問の源は, 遠くは堯・舜・文王・周公・孔子・孟子に, 近くは楊時・朱熹・陸九淵にあり, そしてその開祖はすなわち浙西の張九成と浙東の楊簡であるという。『浙学宗伝』に収録された人物を見ると, 劉鱗長が言うところの「浙学」の概念は, まさに宋明の浙東と浙西を含む浙江全体の「心学」の系譜を指している²⁾。ゆえに劉鱗長は次のように述べている。

于越東萊先生(呂祖謙)と吾が里の考亭夫子(朱熹)とは道を問ひ疑を質し, 卒に正きを揆り, 教沢の漸ぐ所は, 金華の四賢(何基・王柏・金履祥・許謙)にして, 朱学の世嫡と称され, 往事逸きにあらず。姚江に擊楫し, 良知を溯源し, 我が明道の学を覚ること, 斯に盛んと為り, 今豈に遂に絶えて響かんや。縁念するに浙の先正を以て, 浙の後人を呼べば, 即ち浙学又た安くんぞ伝なかるべけんや。周海門(汝登)『聖学宗伝』尚し, 然れども頗る古哲に詳しく, 今儒に略たり。乃ち固陋を揣らず, 稍稍として編匯成書し, 梓して且く行わる。……今夫れ堯・舜・文・周・孔子・孟氏は, 万世の知覚の先なり。大宗の祖, 閩と越と之を共にするも, 具には論ぜず。浙の近宗を論ずれば, 則ち龜山(楊時)・晦庵(朱熹)・象山(陸九淵)の三先生のみ。其れ子韶(張九成)・慈湖(楊簡)の諸君子は, 先覚の鼻祖なるか。陽明は慈湖を宗とし, 子竜溪の数輩は, 靈明耿耿として, 骨血相い貫き, 絲絲としてみだれず, 安くんぞ誣うべけんや。……然れども此の点の靈明骨血, 還に当身に注ぎ, 一たび濯磨を加え, 昭灼を難ずるなく, 反って之を求めれば, 便ち吾が宗譜の牒に登るも, 亦た心学に之が意を加うるのみ。聖は学宗為り, 心は聖宗為り。苟くも其の伝を得れば, 子韶・慈湖而下を論ずるなく, 堪えて慈父と称し, 行いすら且つ堯・舜・周・孔は, 我が正覚に同じ。……心を了りて聖に入るは, 宗門中の大覚為り, 孝に至りては難なし。心を明かにせざる学は, 即ち罔覚に墮落し, 不孝にして薬救すべからず。貴ぶ所個中に還返し, 正宗の伝を認め, 学は斯れを恒にし, 教えは斯れを恒にすれば, 則ち閩の若き浙の若きは, 同属家親にして, 大宗小宗, 共に上岸に登らん。(『浙学宗伝序』, 『四庫全書存目叢書』史111所収, 第2-4頁)

同書に対して, 四庫館臣がすでにかなり精確な評論を行っており, 『浙学宗伝』は「宋より明に訖るまで両浙の諸儒を采り, 其の言行を録し, 排纂成帙す。大旨は姚江(王陽明)を以て主と為し, 而して新安(朱熹)を援きて以て之に入る」(『四庫全書総目』, 中華書局, 1965年, 第561頁)と称している。劉鱗長の目的は, とりもなおさず浙学と閩学を結びつけようというもので, その淵源において心学と理学を「同属家親」とするだけでなく, さらにはその伝承の過程においても相互に関連づけようとしている。

しかし実際のところ、心学、とりわけ陽明心学を「浙学」の嫡流と見なす理念は、劉鱗長以前にすでに芽生えており、たとえば王陽明と湛甘泉を折衷した浙西の思想家である蔡汝楠³⁾は次のように述べている。

吾が浙学は明翁夫子（王陽明）を得てより、炯らかなること日星の如しと謂うべし。然れども門の同志に及ぶや、海内に^ま未だ信ぜざるものあり、目して^{じゅう}柔要^{さい}頹惰^{たいだ}と為すに至りては、^{かな}要^らず亦た功利習気に一二の^と逗漏^とする處ありて、人に^{ひろ}覷破^{ひろ}されるのみにして、益を嶺海に取り、此の^{ひろ}金針^{ひろ}を^{ひろ}掇^{ひろ}い、吾が伯丈^{ひろ}但^{ひろ}だ自ら域を躋至すれば必ず以て師訓を^{ひろ}發明^{ひろ}するのみにあらざるを知り、^{ひろ}興起^{ひろ}して^{ひろ}習行^{ひろ}を漏^{ひろ}し^{ひろ}浙中より以て天下に^{ひろ}遍^{ひろ}まるは、又た何ぞ幸いならんや、何ぞ幸いならんや。（『自知堂集』巻20「致張按察使浮峰先生」、『四庫全書存目叢書』集97、第702頁）

永豊（聶豹）は則ち我が浙学の陽明夫子の緒を承くと謂い、曹溪以後の禅を談ずるが如きは、本意を来すにあらず。（『自知堂集』巻18「致孫蒙泉」，同上、第671-672頁）

蔡汝楠は湖州の徳清出身であるため、その述べる所の「浙学」は、特に明代の東西両浙江地方の陽明心学を指している。これを先の劉鱗長の「浙学」の概念と比べると、「空間」的には一致するものの（東西両浙地方を指す）、「時間」的には狭められている（明代だけを指す）。

しかし清初の浙東の学者である全祖望や黄百家が用いるところの「浙学」の概念は、劉鱗長に比して、時間・空間の両面において狭められているだけでなく、宋代の浙東の学のみ限定し、かつまた内包上の転換も行なわれており、特に浙東の事功の学と経史の学を指している。たとえば全祖望は次のように述べている。

慶曆の際、学統四起す。……浙東は則ち明州に楊〔適〕・杜〔醇〕の五子（楊適・杜醇・王致・樓郁・王説）、永嘉の儒志（王開祖）・^{ひろ}経行（丁昌期）の二子あり、浙西は則ち杭の呉存仁（呉師仁の誤り）あり、皆安定（胡瑗）の湖学⁴⁾と相い応ず。（《黄宗義全集》第3冊、第314頁）

所謂〔〔永嘉〕九先生（許景衡・劉安節・劉安上・蔣元中・沈躬行・戴述・趙霄・張輝・周行己）〕なる者を考うれば、其の六人（周行己・許景衡・沈躬行・劉安節・劉安上・戴述）は程門に及び、其の三（趙霄・張輝・蔣元中）は則ち私淑するなり。しかして周浮沚（行己）・沈彬老（躬行）は、又た嘗て藍田の呂氏〔大臨〕に従い遊び、横渠（張載）の再伝にあらざらんや。……予故に謂えらく晦翁（朱熹）が^{ため}為に未だ成さざるの書、今合して一卷と為し、以て吾が浙学の盛んなるを志すは、実に此に始まると。（同上、第4冊、第405頁）

勉齋（黄幹）の伝、金華を得て益々昌^{さか}なり。説く者謂えらく、北山（何基）絶えて和靖（尹焞）に似たり、魯齋（王柏）絶えて上蔡（謝良佐）に似たり、しかして金文安公（金履祥）尤も明体達用の儒^{さか}為りて、浙学の中興なりと。（同上、第6冊、第215頁）

四明の専ら朱氏を旨とする者は、東発（黄震）最^{さか}為り。……晦庵（朱熹）生平浙学を喜ばず、しかれども端平以後、閩中・江右の諸弟子は、支離・舛戾・固陋にして之にあらざ

るはなく、其の能く中に之を振う者は、北山師弟（何基・王柏・金履祥・許謙）一支為り、東発（黄震）一支為り、皆浙産なり。其の亦た以て先正の倦倦たる浙学の意に報いるに足らんかな。（同上、第6冊、第394頁）

全祖望は浙東と浙西の学は「皆安定の湖学と相い応ず」と考えてはいるものの、浙東の学だけでなく、さらには浙西の学をも含む「大浙学」の概念については、いまだこれを形成していないことがわかる。なぜなら全祖望は先の文章の中で非常に明確に「浙学の盛んなるは、実に此（すなわち永嘉九先生）に始まる」と強調しているからである。のちにその著述においても、浙東諸学派をめぐって説明を展開する際に、その念頭にある「浙学」は依然として「浙東の学」にのみ限定されている。

のちに黄百家もまた「竜川学案」の「案語」において次のように考察している。

永嘉の学、薛〔季宣〕・鄭〔伯熊〕俱に程子より出ず。是の時陳同甫亮も又た永康くつこうに崛興するも、承接する所なし。然れども其の学を為すや、俱に読書・経済を以て事と為し、空疏を嗤黜しちゆつして人牙の後に随いて性命を談ずる者、以て灰埃かいあいと為す。亦た遂に世の忌む所と為り、以て此れ功利に近しと為し、俱に之を目して浙学と為す。（《黄宗義全集》第5冊、第215頁）

換言すれば、黄百家の目にも、いわゆる「浙学」は、とりもなおさず南宋の浙東地方の事功の学であったと言える。

すでに述べたように、劉鱗長は浙江地方全体の心学の系統を閩中の朱子学を受けて興った「浙学」の嫡流と見なしており、この見解は強烈的な郷土意識と門戸の見を含んでいるものの、きわめて独創性をもった見解であり、すこぶる意義深いことを認めなければならないであろう。その意義とは、浙江心学の伝統が脈々と受け継がれていることを明確に示しただけでなく、さらには学術史上、それまで冷遇されてきた浙西の学を初めて自身の研究の視野に入れたことにある。実際、浙西の学は浙東の学と明らかな差異があるものの、一方でかなり密接な淵源ないしは継承関係がないわけではない。また心学、とりわけ陽明学を「浙学」の嫡流に当てるという手法に至っては、偏りに失する向きもあるが、無意識の内に陽明学と宋代以来の「浙学」の伝統の内在的な結びつきを指摘していると言える。なぜならもし心学与史学が融合した（あるいは“心学化した史学”である）「浙学」の根本精神について言えば⁵⁾、王陽明およびその一部の浙中の弟子の学術理念はその最も良い説明の一つとすることができるからである。この中には王陽明が主張する「六経皆史」と「道即事・事即道」が代表する心学の理念が含まれているだけでなく、さらにその門下が重んじた心学または史学の学術的実践が含まれている。たとえば黄綰・季本・張元忞たちは歴史、とりわけ地方史と当代史を編纂することを相当に重視している⁶⁾。そして周汝登の『王門宗旨』と『聖学宗伝』はいわゆる“学術史”の先駆けとさえ言うことができる。それゆえ、浙江地方、とりわけ浙東の陽明学者は、実用実学という目標を掲げるだけでなく、さらには強烈的な独立思考や現実批判の意識をもっていた。換言すれば、陽明学が蓄積統合した形而上の心

性本体と形而下の日用工夫は、いずれも「浙学」の伝統の中にその源を必ず探し当てることができるのである。これはすなわち張九成・楊簡を代表とする心学与陳亮・葉適を代表とする事功の学の有機的結合であり、また呂祖謙を代表とする理学化・心学化した史学からの内在的吸収である。ある意味、陽明以後、浙中の王門の進展変化は、とりもなおさず「浙学」の伝統の中のこのいくつかの方向性に沿ってしだいに展開していったものと言うことができる。

かりに劉鱗長が初めて「浙西」の学を「浙学」という大きな枠組みの中に入れたということについてももう少し考えるならば、清の乾隆期の浙東史学家である章学誠は、「陸を宗として朱に悖らず」あるいは「朱と合わざるも亦た相い誣らず」を強調する前提の下、初めて明確に「浙学」を「浙東の学」と「浙西の学」に区別している。章学誠の目には、「浙西」は朱子学の天下であり、「浙東」はすなわち陸王学の本大本营であり、両地方では「道並びに行われて悖らず」というものの、それぞれ尊ぶところがあり、それぞれ主とするものに事えているのは、紛れもない事実であった。ゆえに章学誠の文章の中に「兩浙の学」を統合することのできる「浙学」の概念が見あたらないばかりか、甚だしきに至っては彼は「浙東の学」を用いて「浙学」全体に取って代え、そして「浙西の学」を「呉中の学」と合わせて一つと見なしたのである。章学誠は次のように述べている。

浙東の学は、婺源に出ずと雖も^り、然れども三袁（袁燮・袁甫・袁韶）の流より、多く江西の陸氏〔九淵〕を宗として、しかして古に服し経に通じ、絶えて徳性を空言せず、故に朱子の教えに悖らず。陽明王子に至りて良知を掲げて慎独を發明し、朱子と合わざるも、亦た相い誣らず。梨洲黃氏〔宗義〕は戴山劉氏〔宗周〕の門に出でて、しかして万氏弟兄（万斯大・万斯同）の経史の学を開き、以て全氏祖望の輩に至りて尚お其の意を存し、陸〔九淵〕を宗として朱〔熹〕に悖らざる者なり。惟だ西河毛氏〔奇齡〕のみ、良知の学を發明して頗る得る所あるも、しかれども門戸の見、之（朱熹）を攻むこと太はだ過ぐるを免れず、浙東人と雖も亦た甚だ以て然りと為さず。……世顧亭林氏（顧炎武）を推して開国の儒宗と為すも、然れども是れ浙西の学よりす。時を同じくして黃梨洲氏（黃宗義）の浙東に出ざるを知らず、顧氏〔炎武〕と并峙すと雖も、しかれども上は王〔陽明〕・劉〔宗周〕を宗とし、下は二万（万斯大・万斯同）を開き、之を顧氏〔炎武〕に較ぶれば、源遠くして流れ長し。顧氏〔炎武〕は朱〔熹〕を宗とし黃氏〔宗義〕は陸〔九淵〕を宗とするも、蓋し專家を講学し、門戸の見を各持する者にあらず、故に相互に推服して、相い非誣せず。学ぶ者 宗主を無みすべからず、しかして必ず門戸を有すべからず。故に浙東・浙西、道並び行われて悖らざるなり。（『文史通義（内篇）』卷5「浙東學術」, 岳麓書社, 1993年, 第175頁）

もちろん章学誠は「浙学」という語は用いず、「大浙西」ないしは呉越の別という概念と密接に関係づけた。ゆえに彼が言うところの「浙東」と「浙西」は、ある種の人文地理上の区分にすぎず、当時の行政区分の実情を表すものではない。章学誠が述べる「浙東の学」の源流とその

特色から見ると、浙東学術の主流は南宋の四明学派から明代の陽明学派をへて、明末清初の劉宗周・黄宗羲学派に至り、その特色は「陸（王）を宗とするも朱に悖らず」というもので、これは劉鱗長が心学を浙学の嫡流の理念としたことと完全に一致している。換言すれば、浙東学術は史学に長けていると言うものの、「性命を論じる者は必ず史を究め、此れ其の卓きんずる所なり」（同上）。この意味から言うと、章学誠が言う「浙東の学」はすなわち心学化した「経史の学」のことであり、これは章学誠と劉鱗長の「浙学」の概念が相い通じる点である。両者が異なる点は、章学誠は「史」という一文字を偏重し、劉鱗長は「心」という一文字を偏重した点、章学誠の「婺源より出ず」とする説の重点は浙西にあり、劉鱗長の「閩の若き浙の若きは、同属家親なり」とする説の重点は閩中にある点、そして章学誠は浙東の学と浙西の陸学の伝承関係を強調し、劉鱗長が強調したのは浙学と閩学の同族関係である点である。

「浙東の学」と陸王心学がこのような緊密な関係をもつ以上、清初の明史館などが「修史条例」を制定する際に、「浙東学派」という呼称を用いて陽明学派と劉宗周学派を指したとともに、当の学派は「最も流弊多し」と非難したことも、あまり咎めるべきではない。しかし黄宗羲は逆にこのような観点は「聚訟の成言・門戸の意見に拠りて其の優劣を考うれば、其れ能く失り無からんか」と考えている。また「向に姚江無くんば、則ち学脈中絶し、向に戡山無くんば、則ち流弊充塞す。凡そ海内の学を知る者は、^{かなら}要らずや皆東浙の衣被する所ならん」（『黄宗羲全集』第10冊、第213頁）と強調している。章学誠が言うところの「浙東学術」が実は黄宗羲の「浙学」の観念にかなり近いということを見抜くのはそう難しいことではない。ただ黄宗羲と章学誠の二人は過剰なまでの郷土愛と同郷の賢人に対する思慕の念を抱いていたため、その地方意識においては、どちらも過度に「浙東」を重要視して「浙西」を軽視し、甚だしきに至ってはその潜在意識において浙西を「抛棄する」意図があったため、この議論において両者の見解は劉鱗長よりもやや見劣りするの言うまでもない。とりわけ章学誠は、戴震（その学問も大浙西の範囲に属する）と優劣を競っていたため、浙東学と浙西学の違いをあまりにも誇張しすぎる傾向があるように思われる。実に錢穆先生が「章学誠と戴震の学問の違いは、さかのほれば、すなわち浙東学派と浙西学派の違いであり、清初にあっては顧炎武と黄宗羲の、南宋にあっては朱熹と陸象山の違いである」と言うとおりでである（『中国近三百年学術史』、商務印書館、1997年、第426頁）。のちに章学誠の『文史通義』は四方に名声が鳴り響いたため、その言は後世に熟知されるだけでなく、ひいては「浙学」を研究する際の「定本」とさえなった。一方、劉鱗長は、学術史上、言及されるだけの地位にほとんどなかったため、その比較的広汎な学術的視野は、しだいに後人に忘れ去られていった。無論、清代以降の心学がしばしば非難され、しきりに排除されるという厳しい学術環境も、後人が章学誠の説を採り、劉鱗長の見解を棄てた重要な要因である。

清代末期になると、章炳麟は「興浙」という目的を達成するため、宋恕たちと杭州に興浙会を組織するとともに、浙東の学と浙西の学を努めて総合的に理解しようと図った。そのため章

炳麟が解釈する「浙東の学」は、史学を重んじるだけでなく、經学をも重視し、「漢宋を雜^{まじ}え事^{つか}え」、朱子学と陽明学を兼ね採り、実に「大浙学」の觀念に近づき、いわゆる「浙江上下の諸学説も亦た是^{こゝ}に至りて完集」したのである（『章太炎全集』巻3「清儒」，上海人民出版社，1982年，第474頁）。そのためのちには、章炳麟の師である俞樾をついに近代「浙学」の創始者とする者もいた。章炳麟たちが「興浙」のため、拳を振り上げ慌ただしく呼びかける中、浙江の官を辞して隠退した幾人かの地方の有力者もまた「浙学」を盛りたてるため精力的に働きかけていた。たとえば天台の張延琛（1854-1911，字は季珩，または補瑕，自ら玉霄外史と号する）が著した『浙学源流述要』（『台州市志』，浙江人民出版社，1998年）という書物は、筆者の知る限りにおいては、最も古い「浙学」に関する研究書である。そしてこれとほぼ同様の目的から、1903年10月に、魯迅や陶成章たちもかの有名な反清団体である「浙学会」に一緒に加入している。さらに浙江省の人々は、当時、盛んに行われていた康有為の今文經学に対して、「浙学の宗流を昌^{あき}らかにし、粵^{えつ}党の流行を絶たん」というスローガンを提出している。清末における主流な學術思潮として「浙学」がいかなる影響力を持っていたかは、以上のことからその一端をうかがい知ることができるであろう。

しかし清末の読書人は「浙学」を盛んにしたもの、「浙学」の概念に対しては明確な境界線を引こうとはしなかった。そして、民国以降の學術界においてようやく「浙学」に関する定義と内包に対する明確な意見の相違が生まれてきた。たとえば錢穆は「心学」を近世後期の「浙学」の主流とし、「私が思うに近世後期の浙学は、王陽明によって基礎作りがなされ、黄宗羲によって垣根が広げられ、章学誠によって室内が完成されたと言える。この三人を合わせて見ることで、おおよそ「浙学」の全体像を得ることができるであろう」（『中国近三百年學術史』，第31頁）。また曹聚仁のいわゆる「浙学」の概念は、章学誠を指して清朝浙東史学、すなわち浙東学派の代表とし、そして「浙学」は惠棟を代表とする「呉学」および戴震を代表とする「皖学」、そして「呉学」と「皖学」の余波を受けて揚州にて勢威を大いに誇った「揚学」とともに、清朝學術思想の四大流派を形成したと考えている（『中国學術思想史隨筆』，三聯書店，1986年，第266頁・第270頁）。呂思勉の『理学綱要』などは、わざわざ「浙学」という一章を設け、さらには「浙学」を永嘉・永康の二派に分けている（商務印書館，1931年，第128-143頁）。また現代の周予同の「浙学」の概念などは、何から何まで呂思勉と同じで、その言に次のようにある。「思うに初期浙学は、たとえば陳亮の粗雑さと陳傅良の墨守など、その技量と反論は、おのずから朱熹の敵ではなかった。しかし葉適の『習学記言』が世に出てから、第三の勢力として朱陸と鼎立するだけでなく、朱熹の全哲学を破壊する勢いさえもつようになった」（『周予同經学史論著撰集』，上海人民出版社，1983年，第178-179頁）。何炳松などは宋代以降の浙江學術に対して「一定の地名と名称」を確定させることを主張するものの、彼は全祖望が『宋元学案』の中で用いている「浙学」，「婺学」，「永嘉の学」などのいずれの呼び名に対しても不満の意を呈し、「この三つの用語は非常に不適切である。なぜなら最初の一つはあまりに広すぎ、後の二

つはあまりに偏っているからである」と考え、やはり章学誠の『文史通義』が定める所の「浙東學術」の四文字が比較的妥当であろうとしている（『浙東学派淵源』、第189頁）としている。

二、「浙学」の系譜について

秦漢以前の浙江地方の學術は、中国學術史全体において、やや脆弱で、大した力量がないように見える。だが後漢以降、魏晉南北朝そして隋唐をへて、浙江地方の學術は非常に大きな発展と伝播を遂げ、著名な思想家（たとえば「実事疾妄」を治学の旨とした後漢の王充）や独特な風格をもつ学派（たとえば陳から隋にかけての智者大師によって開創された「一心三觀、三諦円融」をその思想の旨とする仏教の天台宗）が大量に出現した。しかしこれらは多くの学者の目にはいずれも単なる「浙学」の萌芽と見なさるだけである。「浙学」の眞の形成は、北宋においてなされ、南宋以降、繁榮に向かい、明清時代には「浙学」の最盛期を迎えたと言えることができる。

北宋中期の慶曆・皇祐年間に、浙江地方の学者は、北方より伝来した理学と最初の衝突を経験した。この時期の浙江地方にはまず明州の「楊杜五子（楊適・杜醇・王致・樓郁・王説）」を代表とする一群の学者と理学の先駆の一つである胡瑗およびその「湖学」が學術・教育上、互いに呼応し、続いて永嘉の学者、林石たちが「湖学」に対して積極的に追随してこれを広めた。まさに後者の努力によって、これよりややおくれて「洛学」や「閩学」が永嘉において広く伝播するための大々的な基礎固めがようやくなされたのである。そして理学の思潮を全面的かつ広範囲にわたって浙江に引き入れたのは、林石たちの後を継いで興った「永嘉九先生（許景衡・劉安節・劉安上・蔣元中・沈躬行・戴述・趙霄・張輝・周行己）」である。彼らは浙江における「洛学」と「閩学」の主要な伝道者であった。九先生によって「洛学」が受け継がれたと同時に、「閩学」ひいては王安石の「新学」の影響をさらに受け、これに浙東にもともとあった非常に濃厚な“求实致用”の学風が加わったため、彼らは単に師説を踏襲・伝承することに飽き足らず、ある方面において正統な「洛学」と明らかな差異を表出した。師説を継承しつつも師説に固執せず、一学説を伝播しつつも一学説に固執しないという學術理念は、後世の「浙学」の発展に対して大きな影響力をもった。ある意味、南宋ないしは明清時代の浙江地方では各種學術思想が泉のごとく湧き起こり、諸学派の間で「枝葉日ごとに茂り、流派日ごとに広まる」（『四友齋叢説』卷4、『四庫全書存目叢書』第103冊、第311頁）といった繁榮の様相を呈するに及ぶが、いずれもここにその源を発している。

南宋中期、「浙学」は全盛期の段階に入り、ごく短い数十年の間に、大勢の著名な学者が続々と輩出され、それぞれが個々の特色をもつ多くの学派を形成し、たとえば温州には「鄭氏の学」、平陽の学、「永嘉事功の学」があり、婺州には「呂学」、「永康の学」、唐氏の「経制の学」があり、明州には「四明の学」等々があった。これら「浙学」の分派と理学の關係は、各々その

形態が異なり、特質も多岐にわたっていると言うことができる。その内、あるものは理学思潮の影響を受け、あるものは理学の中心的な流派を形成し、またあるものは反理学の強烈な姿勢をもって頭角を現した。したがってこの時期の「浙学」と理学の間は、全面的に融合し、かつ相互に衝突するといった状況であり、さらにはこのような状況は南宋後期までそのまま引き継がれ、甚だしきにいたっては元代および明代初期における「浙学」の方向性にまで影響を与えている。

一方、一度は理学と袂を分かち対等に振る舞っていたいくつかの学派は、南宋後期において衰微の道をたどったため、「浙学」は全体的に理学、特にしだいに支配的な地位を占めだした程朱理学に対して全面的に回帰する様相を呈し、膨大な朱子後学の中において、いわゆる「醇正」なる支流も浙中に少なからず現れるに至った。実に全祖望が「晦庵生平浙学を喜ばず、しかれども端平以後、閩中・江右の諸弟子は、支離・舛戾・固陋にして之有らざる無く、其の能く中に之を振う者は、北山師弟一支為り、東発一支為り、皆浙産なり、其の亦た以て先正の倦倦たる浙学の意に報いるに足らんかな」(『黄宗義全集』第6冊、第394頁)と言うとおりである。ここで言う「北山一派」とは、南宋後期から元代初期に婺州に興った「金華朱学」、別称「北山四先生(何基・王柏・金履祥・許謙)」を指している。この一派は、正統朱子学の色彩を比較的多く残しているため、後世から朱学の嫡流、理学の正統と見なされている。また「東発一派」とは、慈溪の学者、黄震を指し、彼は宋末の浙東における朱子学の主要な後継者である上に、程朱理学を修正したことでも知られる。「北山」も「東発」も、程朱学を継承すると同時に、ともに自身のいくつかの特色を明確に示しており、その主なものは次の三点である。第一に、性理空談に専心せず、比較的实际を重視している点。これは明らかに「浙学」の“求实致用”という伝統的な学風の影響を受けた結果である。第二に、やや強烈な“疑經思想”を有している点。第三に、陸学との関係において、同時代の呉澄を代表とする「江西朱学」のように「和会朱陸」を主張しないものの、いくつかの方面においては多かれ少なかれ心学の影響を受けている点。「金華朱学」と「東発の学」のほか、南宋後期には、永嘉の学者も徐々に葉適の事功の学から離れだし、程朱理学を追随する道を歩むようになり、たとえばこの時期、永嘉で最も著名な葉味道と陳埴という二人の学者は、いずれも前後して朱子学を受け入れ、さらには朱子学を積極的に伝播することを己の任務とした⁸⁾。

また一方で、明州で目覚ましい活躍をした「四明四先生(楊簡・袁燮・舒磷・沈煥)」は、逆に「陸学」の旗印を高く掲げ、程朱学と対抗した。四先生は総じてみな心学の範疇に属するとは言うものの、心学に対する理解と表現には差異があり、これによって彼らの異なる思想的特質がはっきりと提示されている。たとえば楊簡は公然と仏家の思想を導入して、心学を極端な「唯我論」の道へと推し進めた。そして袁燮は婺州や温州などの地の事功の学を積極的に吸収して、政治倫理を開拓して発展させることに重点を置き、心学を「篤実」の方向へと導いた。また舒磷は朱陸の説を調和させることに力を尽くすと同時に、捉えがたい心学を普段の日常生活

へと向かわせた。さらに沈煥は「古今を弁論し」、心学によって万物の道理に精通し、人を成功に導くことができるよう努め、「心学化した史学」という思想的傾向がここではじめて現れた。心学の変化の軌跡から見ると、四先生はそれぞれの影響力によって浙江心学をさまざまな方向に向かって導くだけでなく、のちの王陽明が心学に対する全面的かつ徹底的な改造を行うために、ある程度条件を整え、基礎固めを行い、さらには明代中後期の王学の出現と展開のために、豊富な思想的資源を提供している。

南宋の「浙学」が発展する過程において、呂祖謙はかつてその一挙手一投足が全局面に影響するという作用を発揮していた。彼は陳亮・朱熹・張栻・陸九淵らと講学して道を説き、弁論をくり返すなど、ともに浙中の良好な学術的雰囲気を作りあげた。かの有名な「鵝湖の会」はとりもなおさず呂祖謙が間に立って取りもった朱学と陸学の交流弁論の大集会であった。そもそも呂学は朱学と陸学を兼ね備えた特色をもつが、朱学に傾倒した主要な勢力は、おおよそ二つに分けることができ、一つは金華に伝わり、一つは寧波に入った。前者は「北山四先生（何基・王柏・金履祥・許謙）」をへて明初の宋濂・王禕・方孝孺に至り、後者は王応麟・胡三省をへて明初の鄭真に至った。また陸学に傾倒した主要な系譜は、「四明四先生（楊簡・袁燮・舒磷・沈煥）」から変遷の軌跡をたどることができる。「四先生」と呂氏兄弟の関係は、いずれも非常に密接で、彼らの心学の理念とその学説は江西の陸学に直接伝承されており、むしろ呂学を通して陸学と結合したと言った方がよい。ある意味、浙東心学は、その当初から浙東史学の思想的因子を内に含んでいたと言えるかもしれない。思うに「浙学」が興った当初は、経学から史学へと移り、衰退するに及んでは、往々にして史学から文学へと移り、心学の興隆は、実に一旦衰えた「浙学」を再び盛んにするという局面を開いたのである。

浙東心学の系譜は、四明の一派を除けば、ほかに淳安に伝わった一派がある。しかし四明も淳安も、それぞれ最初の代表的人物である袁甫と銭時は、ひとしく心学と史学を融合する思想的傾向を有している。そしてこの二つの心学の末流は、大部分が“虚を致す意が多く、実を致す力が少ない”といった兆候があり、疏空虚狂の弊に流れることを免れず、その伝習者は非常に多かったものの、思想的に成果を上げた者は少ないように思われる。元代の趙偕は楊簡に私淑して心学の中興を成し遂げ、これによって心学の伝承を明初に引き継いだ。しかし心学派の地位について言えば、当時、宋濂や王禕の学術成果に比肩するに足る者はまだいなかったため、南宋から明代に至るまで、心学派の伝承は実に史学派の盛んなることに及ばなかった。たとえば元末明初の頃、婺州において相次いで現れた鄭牧・許謙・宋濂・王禕・胡翰などの一群の著名な学者は、いずれも鮮明な史学的探求心を有していた⁹⁾。

明代中期の王陽明の学説は、宋代以来の浙東の豊富な文化土壌の中から生まれた。邵廷采などは「浙東は金華の数君子の後を承け、名儒接出す。正徳・嘉靖の際、道統陽明に萃あつまれり」（『思復堂文集』、第52頁）と述べている。陽明心学は非常に創造性に富み、南宋の浙東心学との間に考え得るいかなる淵源関係ももたないにもかかわらず、学術精神の本質面について言え

ば、王学の発生もまた浙東心学の余波を受けたとすることができ、そこである意味、陽明心学を浙東心学派の復興と見なすこともできる。陽明以後、浙江の學術は基本的に王学あるいは同じ心学の系統に属す湛甘泉の学によってまとめ上げられた独壇場であったが、浙東と浙西はそれぞれ異なる道筋をたどったため、両地方には各々異なる系譜が生まれた。

浙東の陽明心学は、“王学激進派”、“王学穩健派”、そして“王学修正派”に分けることができる。まず“激進派”には、王畿・万表・周汝登および陶望齡兄弟などがおり、浙西の董澐父子や管志道¹⁰⁾、ひいては袁璜もまたこの一派に属す。当時、「俗学は伝注を宗とし、王学は『四無』を宗とし」(『思復堂文集』、第126頁)ており、「四無」説を最初に唱えた王畿は、浙東地方において講学して道を説いただけでなく、さらには浙西地方においても門弟を広く受け入れ、張履祥さえも彼の影響を受けた。ゆえにこの一派の射程範囲は浙東から浙西にまで至り、影響力は哲学から文学にまで及んだ。次に“穩健派”には、徐愛・季本・錢德洪・孫応奎・程松溪・王宗沐などがある¹¹⁾。この内、永康の出身である程松溪は「^{つと}早に文成(王陽明)の教えを受け、^{くれ}晩には湛翁(湛甘泉)の門に及び」、「功を用いて實地に有り」、郷里の先哲である陳亮の後を継ごうとした¹²⁾。最後に、“修正派”には、黄綰・張元忭・劉宗周・潘平格¹³⁾・陳確・黄宗羲・毛奇齡・邵廷采などがおり、この内、潘平格と陳確が浙西を原籍とするのを除けば、大部分は浙東を原籍としている。この一派の特徴は、陽明に立脚して王学末流を批判し、さらに一歩進めて陽明自身を修正し、心学化した史学をして実学の傾向をさらに浮きあがらせた点にある¹⁴⁾。彼らが王学末流を批判した武器は朱学ではなく、多くは浙東地方固有の実学の伝統であった¹⁵⁾。その「務崇躬行して、実践を砥ぐ」という学問態度は、“穩健派”と比べると「更に發明多し」(『思復堂文集』、第48頁)と言われる。

一方の浙西は、“湛王折衷派”と“王学反対派”に分けることができる。“湛王折衷派”には、蔡汝楠・唐樞・錢薇・許孚遠などがいる。これらの人々は甘泉学派を浙西に組織した重要な分派であり、嶺南心学と浙中心学を融合させ¹⁶⁾、さらには甘泉学を通じて程朱理学と結びつけている¹⁷⁾。“王学反対派”は、さらに二派に分けることができる。一つは劉宗周の浙西における継承者、たとえば張履祥・呂留良・陳確などである。この一派と“湛王折衷派”の関係は非常に緊密である。劉宗周は長興の丁元薦をへて許孚遠に従い、「杖屨を侍して才に月余、終身師説を守りて変わらず」、遂に「良知に沿わずして慎独を掲ぐ」(『思復堂文集』、第18頁、第311頁)。もう一つは、朱学の立場に立って王学を批判した顧応祥・陸瓏其・陸世儀などである¹⁸⁾。この二派を比較して述べるならば、劉宗周の後継者の大部分は王学を経由して朱学を摂取しているため、陽明自身に対してなお肯定するところがある。一方、顧応祥たちは朱学に立脚しているため、陽明後学を批判するだけでなく、陽明自身をも直接攻撃している。

清代の康熙・乾隆年間に至っては、陽明心学の発展は二つの段階に分けることができる。第一の段階は、康熙・雍正期である。この時期、朝廷が程朱理学を提唱したにもかかわらず、江蘇・浙江地方を中心とする民間知識人は、程朱理学以外の学説を持ちだしてこれに対抗しようとし

た。ある者は、朱学を尊崇すると同時に漢学を標榜し、それはまるで浙西の知識人のようであった。またある者は、王学を尊重するという前提の下、はっきりと史学を表明し、それはまるで浙東の諸子のようであった。両者を比べると、史学を王学に加えた浙東の抵抗勢力の方が漢学を朱学に加えた浙西に勝っていたようである。浙西は当時の漢学の興隆地である江蘇や安徽と隣り合わせであり、さらには朱子学および湛甘泉の学を変質させた地理学的背景があったため、朱子学を尊崇するという前提の下、漢学を標榜したのである。第二の段階は、乾隆・嘉慶年間である。この時期、呉中ではすでに漢学が完全に宋学に取って代わっており、惠棟を代表とする呉派漢学がまさに生まれようとしていた。しかし浙東では、宋学に取って代わったのは王学と内在的な結びつきをもった史学、とりわけ「当代史」であった。そしてこの時の浙西は、すでに日ごとに意気消沈し、漢学あるいは史学を問わず、いずれもあまり多くの功績を立てるといふこともなく、さらに朱学かそれとも王学かということさら問題にされていなかった。

興味深い点は、浙中の王門から出現した分派と泰州の王門の分派が極めて似ているという点である。王艮以後の泰州王門は三つに分けることができる。一つは顔鈞・何心隱・羅汝芳などを代表とする“世俗派（別名、游侠派）”であり¹⁹⁾、もう一つは王棟・耿定向・方学漸を代表とする“中行派（別名、務実派）”であり、最後の一つは王爨・鄧豁渠・鄧以讀を代表とする“異端派（別名、自然派）”である。浙中王門には明らかな世俗化の風潮がないとはいうものの、逆に“中行化”と“異端化”の傾向は存在した。前者は錢徳洪・季本・蔡汝楠・張元忭・徐孚遠などを代表とし、後者は王畿・董澐・周汝登・管志道・二陶などを代表とした（さらに金華地区を中心とする“穩健派”もいる）。後来、政治環境の改変により、浙中、とりわけ浙西の呉下地方には、さらに“政治化”と“逐利化”の趨勢も現れた。そして前者はそのまま発展して遂に東林学派および黄宗羲や顧炎武を代表とする啓蒙主義的思潮となり、後者は数多くの浙江商人が利益追求をする際の最大の理論武装となった。王学の“世俗化”という傾向については、江右の王学と非常に関係が深いと言ふべきである。江右王学の特徴の一つは、農村における宗法社会や親族の血縁関係とのつながりが特に緊密である点であり、宗法家族社会はとりもなおさず世俗社会の本質的な構成要素ないしは有機的構成部分であり、これはすなわち顔山農・何心隱・羅近溪など、泰州王門における“世俗化”の代表人物がなぜみな江右出身であるのかという原因の一つである。当然、浙中にも比較的厳格な宗法家族制があるが、これを江右に比べると、その勢力は明らかに薄弱で、とりわけ比較的発展した浙西や寧波・紹興地区においてはその傾向が強かったようだ。したがって浙西の管志道は、顔鈞や何心隱と同じく黄宗羲によって泰州学派の後継者とされているものの、後者を猛烈に非難して次のように述べている。「今の時、晦庵の学既に陽明のおほ掩う所と為り、陽明の学は又た顔〔鈞〕・何〔心隱〕等のおほ敵う所と為る。楊墨の公案を執りて以ておほ仏老を攻め、真に螻蛄のあらが轍に抗うが如し。積老の心法に通じて以て聖学に入り、将に又た竜ならずんば蛇ならず。専ら儒宗によ倚り、必ず名利の根を蔵して性命にそむ反かず。禅理を旁求し、仍お虚狂の見に長じて反て其の庸徳を遺す」（『楊若斎集』巻1「奉復天台耿先生

筆示排異学書』)。さらに浙中および泰州の王門にはいずれも「異端派」がいるが、浙中の「異端派」は「円融高遠」な「異端派」に属し、泰州の「異端派」は低俗で庶民的な「異端派」に属している。また浙中の方は王学を一步押しすすめ精緻化と「三教混一化」²⁰⁾ 化の方向に向かわせ、泰州の方は王学を一步押しすすめ世俗化と宗法家族化の方向に向かわせており、したがって王学は「形而上」と「形而下」の二つの領域において等しく開拓することを得たと言うことができる。

以上を総括して述べると、陽明以後の浙江の学術には以下のいくつかの特徴が挙げられる。第一に、浙東心学は王学を修正してから実学と史学に向かい、浙西心学は王学と湛学を折衷してから朱学と經学に向かった²¹⁾。第二に、江蘇の地に近づけば近づくほど、朱学の影響はいよいよ強くなり、東林学派もまた朱学と王学を調和させようとする傾向があったものの、これを浙西の王湛折衷論者に比べれば、王学的傾向において大きく見劣りがする²²⁾。第三に、浙東と浙西の間にまたがった要となる劉宗周は、その影響力が錢江の兩岸にわたっており、浙西学術の品格を高めた彼の功績を見過ごしにすることはできない。第四に、杭州は浙東の学と浙西の学の緩衝地帯として、この両地域の学者が集会し講学する重要な場所であったため、その学術的性格においても、浙東の学風と浙西の学風を兼ね備えている。第五に、もし明代以後の「異学」は宋学を放棄して諸漢学に戻ることを趣旨とし、「皖学」は宋学と漢学をひとしく放棄して伝統儒学の回帰することを求めたと言うならば、「浙学」は明学を起点として宋学と漢学を融合させたと言うことができる。

〔附記〕

本稿は科学研究費補助金（特定領域研究「寧波における知の営みとその伝統－学脈・宗族・トポフィア－」）による研究成果の一部である。なお錢明氏は、本科研の海外研究協力者でもある。

原注

- 1) 劉鱗長、字は孟竜、号は乾所、福建の晋江の人、万曆47年の進士、官は南京戸部郎中に至る。
- 2) 全編を通じて宋明の浙江の学者、計41名を収録し、その内6名は浙西の出身者であり、それはすなわち張九成・康邵・邵経邦・鄭暁・許孚遠そして陳竜正である。
- 3) 蔡汝楠の父、蔡圯（字は玉卿、号は夷軒）は、かつて「甘泉翁の門に遊び、『新論』・『心性図』に序し、甚だ期許有り。継ぎて門人の陸元静は陽明翁の学を談じ、喜ぶこと甚し、舟を買い越に入らんと欲し、会間両つながらに広く行われ、未だ果せず。日々其の書（陽明の書を指す）を取り之に沈浸し、汝楠に命じて業を天真に卒えしむ。」（『東廓先生遺稿』巻13「延平府同知封中憲大夫夷軒蔡公墓碑」）。ゆえに汝楠の学には王湛折衷の傾向があるのである。
- 4) 胡瑗はかつて范仲淹の招聘に応じて蘇州教授となり、のちにまた滕宗諒の招きに応じて湖州教授の任に就き、その教えはついに「蘇・湖の中に行われ」、当時の人々は「夙より夜まで勤瘁すること二十余年、学校に専切するは、蘇・湖に始まり、太学に終わる。其の門を出ずる者、無慮数千余人。故に

今の学ぶ者 夫の聖人の体用を明かにし、以て政教の本と為すは、皆 臣師の功ならん。」(『黄宗義全集』第3冊, 第57頁)と称した。したがってこの「湖学」は湖州の学問を指すのではなく、胡瑗が蘇州および湖州で展開した講学活動を指すのである。ゆえに『宋元学案』『安定学案』に次のように記載されている。「湖学に在りし時、福唐の劉彝 往きて之に従い、称して高弟と為る」(同上, 第56頁)。

- 5) 「心学化した史学」とは、すなわち朱熹たちの「理学化した史学」に対して言ったものである(何俊『南宋儒学建構』, 上海人民出版社, 2004年, 第293頁)。梁啓超はかつて浙東學術史上の心学と史学の関係について論述したことがあり、次のように指摘している。浙東學術は王学を源とし、これは陽明学と史学の結合であり、その間に鍵となる役割を演じたのは黄梨洲と邵念魯である(『中国近三百年學術史』, 中国書店, 1985年, 第50-51頁を参照)。これと関連するものとしてさらに心学と事功の学との関係があるが、これについては、近年、少なからぬ研究者がすでに詳細な議論を行っている(蔭復「論宋明浙東事功学与心学及其合流」, 『東南文化』, 1989年, 第6期および王鳳賢・丁国順『浙東学派研究』, 浙江人民出版社, 1999年を参照)。事実、浙東学者が言うところの「史」は、文献・経制・事功・器用など、情理や事情の変化の各方面を含んでいる。したがって心学と史学の関係は心学と事功の関係を含んでおり、「心学化した史学」は狭い意味で言えば「心学化した様々な事柄に関する造詣」である。
- 6) たとえば張元忬は独自に『館閣漫録』10巻と『雲門士略』5巻を完成させただけでなく、さらに孫鑣と『紹興府志』50巻を編纂、楊維新と『会稽県志』16巻を編纂、張元復と『広皇輿考』などの歴史地理の方面の著作を増補している。その長子の張汝霖は読史社を設立し、「読史・研史」は明代末期の浙東地方において一気に盛んになり一つの風潮となった。さらにのちに張岱は祖父である張汝霖の“読史の精神”を継承し、生涯を通じて、歴史書を著すことを自任し、最初の史学方面の著作である『古今義烈伝』は崇禎元年に完成し、そしてこの世を去るまでに『越人三不朽図賛』を刊刻している。張氏は三代にわたって、みな陽明学と関係があり、かつみな史学を志しており、これは錢穆先生が『中国史学名著』の中で言うところの「陽明学派の下には史学を講じる人物がおらず、『明儒学案』全体の中では、唐荆川だけが史学を講じたが、彼は陽明学派の中で重要な人物ではなかった」という論断は偏りに失する。
- 7) 朱熹の原籍は江西の婺源(明代においては安徽に属す)であり、章学誠が浙東の学は「婺源より出ず」と称する理由はここに拠る。
- 8) 陳国燦「論宋代“浙学”与理学關係の演变」, 『孔子研究』, 2000年, 第2期を参照。
- 9) 董平「浙東学派之名義及其内函」, 『思想家』(南京大学), 江蘇教育出版社, 2002年4月を参照。
- 10) 管志道は王夔が指摘する「当下本体」の説に深い感動を覚えた(管志道『理学酬諮録』巻下「自紀師友幽明印心機感大略」に引く、荒木見悟『明末宗教思想研究-管東溟の生涯とその思想』, 創文社, 1979年, 第37-39頁を参照)。ゆえに黄宗義は管志道を「泰州学派」に入れたのは、あながち道理がないこともない。しかし管志道は泰州学派の思想、特に“出世一番・担当世界”を主張する観点に対し、激烈な批評の態度を持ち、甚だしきに至っては泰州後学のこのような倫常を無視する傍若無人なその態度を王良本人に遡及した(同上を参照。按ずるに、管志道の思想に関する研究は、筆者の管見に拠れば、上記の荒木氏の書が唯一の研究書である)。管志道の泰州学派に対する批評態度について、黄宗義も十分に注意を払い、彼は「泰州の張星見竜」に対して批評する所があるが、しかしその主旨はやはり彼を泰州学派の名の下に入れようとするもので、その理由は管志道が三教合一を主張し、「儒釈の波瀾を決し」たからであり、したがって結局、泰州の「派下の人」とされている(『明儒学案』巻32「泰州学案一」, 第708頁)。
- 11) 羅洪はまず「明水陳公墓志銘」の中で次のように述べている。「此の学を念じてより当に極致を詣で、千載一時の機を負わず、先生(陳九川)其の重き負荷を自任して且つ堅く、東南の士人 帰心取平して、卒に貳者を疑う無く、吉有の東廓・双江の諸公に在りては、撫に在りては則ち先生 倡首 為り、蓋し浙中の未だ有らざる所なり」と(『念案集』巻15, 『四庫全書』第1275冊, 第326頁)。この言は明らかに江右を持ち上げ、浙中を貶めている嫌いがある。結局、浙中と江右にはどちらがより王門に貢献しているかという問題があり、実に物事に対する見方は人によって異なるものである。しかし羅洪はまず竜溪を、甚だしきに至っては緒山を譏り、東廓そして甚だしきに至っては南野・明水などの人々を称賛したので、故意に郷里の賢人を持ち上げるという感情的要因があつてこうした作用が起

こっているのではないということではできない。たとえば次のように述べている。「陽明王公は学を以て自ら命じてより、其の門に遊ぶ者衆く、融会敷衍して之を人に伝うる者は、東廓先生に若くは無し」と(同上、『東廓鄒公墓志銘』、第328頁)。さらに次のように言う。「方に陽明公の存するや、良知の説を伝うる者、各々其の意を以て解を為し、惟だ先生は則ち独り公の言是れ述ぶ。陽明公の没するや、良知の統を承くる者、各々其の資を以て的と為し、惟だ先生は則ち独り公の言是れ守る」と(同上、卷17、「祭鄒東廓公文」、第385頁)。彼は竜溪を偲ぶというものの、「却て山陰の王子の輩を憶い、昔年曾て此に玄虚を話す」と(同上、卷22、「登報恩浮図懷竜溪」、第509頁)。そしてその実、遠回しに竜溪を批判しているのである。彼は、緒山との熱くもなく冷たくもない関係さらには各々その道を行なうというやり方に対しても非常に不満を懐いている。「沢国処逢、年を記さず、一回相い見ゆるや一たび冷然たり。……此の行ない是れ尋常なる別れにあらず、為に春風に向かいて自ら船を放つ」と(同上、「贈銭緒山」、第510頁)。反対に浙中の邵廷采を見れば、両地の儒者に対する評価はずっと公平であるように見える。彼も同郷者に対して明確な傾向があるものの、江右の諸子に対する評価は逆に決してけちなことはせず、「陽明の世、門士多し。……故に其の伝習に功有る者(按ずるに、原文は「者」字が抜けている)を択べば、徐愛・銭徳洪・鄒守益。若而して入れば、其れ未だ醇ならざる者を審別す」と。また「陽明の後は、惟だ銭緒山・鄒東廓・歐陽南野能く師伝を守るも、再伝すれば弥いよ失す」と(『思復堂文集』、第42頁・第317頁)。

- 12) 盧屏・朱昌編『明礼部尚書程文徳文史選』、第9-14頁を参照。按ずるに、全祖望の「与鄒南溪論『明儒学案』事目・陽明永嘉弟子」に拠れば次のようにある。「王鶴潭(王崇炳およびその『金華徵獻録』を指す)は、永嘉・五峰(永康を指す)の諸公並びに姚江の緒を以て、何を以て録さざるかを知らず。按ずるに先生(黄宗羲を指す)固より陽明の弟子失落して備わらざる者多しと言ひ、五峰の諸公は樸学淳行、竜溪の横決に類さず、然れども造る所も亦た未だ深からざるに似たり。之を「浙中学案」の後に附して可なり」と(『全祖望集匯校集注』中、上海古籍出版社、2000年、第1694頁)。ゆえに鄭性は『明儒学案』を補刻する際に、全祖望の意見に従って、「戩山学案」の後ろに「附案」を置いて増補し(しかし賈氏紫筠齋刻本は補録していない)、嘗て永康で講学した程養之(字は先粹、「弱冠にして諸生と為り、姚江に往きて業を陽明の門に受く」)が建てた五峰書院(程が越より帰ったのちに「之を建て」、のちに「黜けられ、且つ院を毀たれ、数年を越し」、そして「之を復す」(『黄宗羲全集』第8冊、第998頁))の「四先生」を収録しており、「四先生」とは、すなわち応典(字は天彝、号は石門、永康の人、正徳甲戌の進士。「初めて章懋に謁えしとき、奮然として斯道を担負するの志有り、後に黄崇明を介して王守仁に稽山に見え、授けるに致良知の学を以てし、帰して五峰書院に講学す」。そして黄崇明によって「浙中の罕儷」と称賛された(同上、第994頁))、周瑩(字は徳純、号は宝峰、永康の人、「姚江に学び、既に得る所有れば、乃ち其れ五峰に学ぶ」(同上、第995頁))、盧可久(字は徳卿、永康の人、陽明に于越に従うこと三月、陽明歿して後は、「帰して徒を聚め五峰に講学す」(同上))、杜維熙(字は子光、号は見山、『悔言録』を作り以て自ら励み、復た五峰に至り其の道を尽くし)、学は「復性を以て宗と為し、……真率簡易、辺幅を修めず」。周海門は「『悔言録』を見て、以て大悟の後に非ずんば恩農更道せず、姚江よりして直ちに洙泗に溯ると為す」(同上、第996頁))である。このほか「副使顔冲字先生鯨叙伝」一篇がある(顔鯨、字は応雷、号は冲字、慈溪の人、嘉靖丙辰の進士。「其の学求仁を以て宗と為し、黙坐澄心を以て入門と為し、踐履操修を以て見性と為し、しかして慎独に妙、黙識に極たり」。劉念台は、「先生(顔鯨)学問の頭脳におけるや已に其の大意を窺見し、故に至る所に樹立磊落す」(同上、第997頁)と言う)。したがって永康を中心とする金華地方は、当時も浙中王学伝播の地の一つであったということが出来る。

- 13) 潘平格は「二十歳にして程・朱学に従事し」、「五年を越えて又た王・羅の学に従事し」、後に「程・朱・王・羅の旨の孔・孟に合せざるを知る」(毛文強「潘先生伝」、『求仁録輯要』巻首)。ゆえに程・朱の“朱敬涵養”・“格物窮理”および“理氣説”等に反対するだけでなく、さらには王陽明の“心体無善無悪”説および王畿の「四無」説に反対した(『容肇祖集』、第470頁を参照)。しかし彼の陽明に対する不満は、一般に王畿が出どころとなっており、王畿を批判する際には陽明までも持ちだしてくる。彼の宋明諸賢の弊害に対する見方は非常にはっきりしており、「総じて学者の注を読み講を聞くに、先ず宋賢の説より入り、或いは又た陽明・竜溪の説より入るに因りて、しかして未だ嘗て孔門の経書を読まず、故に意見偏狹、窠臼難揮。某の所以の説は『得て注を看るなかれ、得て諸賢の語録を

看るなかれ』、蓋し嘗て深く其の病に中れば、確かに其の害を知り、故に痛切に之を言うを惜しまず」(『求仁録輯要』巻7)。その実、潘平格はこの種の鋭い刃の切っ先のような批判意識は、まさに王学内に在る精神の体现である。

- 14) 梁啓超は次のように言う。「明清交替の際、王門では劉宗周一派だけが盛んであり、その学風はしだいに強健なものとなっていった。……そして黄宗羲の後学者に対する影響は非常に大きかった。黄宗羲は清代浙東学派の創始者となり、その流派は分かれて二つになり、一つは史学であり、もう一つはすなわち王学である」と(『中国近三百年學術史』、第40頁)。もし王学を史学と併せて見るならば、このような傾向を「心学化した史学と実学」と見なすことができるだろう。そしてこのような傾向は浙中王門の一部の学者、とりわけ清初の浙東学者において、顕著に現れている。
- 15) 黄宗羲は次のように言う。「金華は何・王・金・許より以後、先生(明儒の章懋を指す、字は徳懋、蘭溪の人、成化丙戌の会試第一)の風を承け之を接ぎ、其の門人は黄傳・張大輪・陸震・唐竜・応璋・董遵・凌瀚・程文徳・章拯の如く、皆其の伝を失わずと云う」と(『黄宗羲全集』第8冊、第371頁)。つまり陽明学と事功の学の伝統は金華、甚だしきに至っては浙中地方全体(たとえば台州・衢州)において相互に関連する趨勢を誇ったと言える。心学と実学という両大浙江地方の学術伝承は、明末清初に至って完全に歩みをともにしたため、浙江の近世学術思潮の次なる方向転換を促したのである。
- 16) 陳白沙の弟子は数百人で、林光(1439-1519、字は緝熙、東莞の人)を筆頭とする。白沙に師事することおよそ二十年、のちに浙江の平湖で教諭を務めることおよそ九年、その間、『嘉興府志』の編纂を主宰し、白沙学が浙西で広まるために重要な作用を發揮した(『容肇祖集』、第218頁、第227頁を参照)。のちに浙西の儒者は甘泉学を好み(たとえば沈佳の『宋明四子書』は、濂溪の『通書』・明道の『定性書』・白沙の『自然書』、甘泉の『心性書』を合わせて一書にしたもので、嘉靖34年には張淙が浙西にて刊刻し、廖憲が増城にて刊刻し、張潮が序を著した(『性命聖理學匯函』、『中国子学名著集成』、台北、中国子学名著集成基金会、1978年を参照)、林光の浙西における学術活動と無関係ではなかった。
- 17) たとえば「敬庵(許孚遠)格んで程朱を宗とし、居敬窮理し、言動皆矩準有り」(『思復堂文集』、第18頁)。
- 18) 朱之瑜(舜水)もある意味またこの系統に属す。彼は余姚に生まれるというものの、幼い頃から兄に従って松江に寓居し、のちに松江府から恩貢生に合格し、さらに浙西の朱永祐・張肯堂そして呉鐘恋に師事し、浙西の学者との交流が浙東よりはるかに多かった。ゆえに彼の思想において、朱学の成分は王学を超えているはずだが、その中に在っても比較的明らかな実学史学をもつ傾向をなお有している。
- 19) 袁中道『杵林紀譚』の記載に拠れば、次のような記載がある。「伯修問う『王心斎は如何なる人か』と。叟曰く『也た是れ一箇の俠客なり、所以に一派を相伝して波石(徐樾)為り、山農(顔鈞)為り、心隠為り、各々身を殺すも悔いざるの氣有り。波石は左轉為りし時、事相い干せず、挺然として出で、遂に死を以てし、肉骨糜爛す。山農は以て船事を行うを以て人の恨む所と為り、羅近溪之を救うに非ず、幾ど以て死に至りて、但だ諱成せざるのみ。心隠は言を以て人に忤い、遂に殺人媚人の手に死す。蓋し心斎の従来の氣骨高邁なるを以て、充くして禍を懼れず、奮いて身を顧みず、故に其の児孫は都此くの如し、所謂 竜は竜の子を生むなり、果然として虚なるに非ず』」(潘曾紘『李温陵外紀』、『明代史料集珍』、第84頁)。そしてこれらの「俠客」の身において表現されてきたものは、また皆「嶽崎豪傑」(『黄宗羲全集』第10冊、第343頁)の氣のためである。このような氣勢が、浙中王門になかったと言うことはできないが、泰州王門にははるかに及ばなかった。明末清初に至るまでずっと、天崩地解した社会の大変革を迎えるに当たって、これは江蘇・浙江一帯の学者の尊ぶ所の豪傑精神へとようやく変化を遂げた。
- 20) 管志道はかつて多少の憂いを込めて次のように言う。「我が朝は正に三教混一の機に当たり、しかして未だ其の中に極みを立つる者有らず」と(『楊若斎集』巻1「奉謝先生書儀兼聆詠異権子二編」)。そして自身の同志がこのために貢献することを期待している。
- 21) したがって浙西の学者は陳建の『学部通弁』に対してべた褒めしており、たとえば張楊園は次のように言う。「『学部通弁』を承借して、伏して読むこと一過、先生の竜蛇を放ち、虎豹を駆るの心切なるを知れり」と(『楊園先生全集』巻14「答呉汝典書」)。また陸隴其は次のように言う。「陳清瀾 伝を

立つるに、最も考亭の干城と為すに足る」と（『三魚堂文集』巻5「答徐健庵先生書」）。そして浙東の黄宗羲は逆に『明儒学案』において一文字も陳建について取りあげておらず、なぜなら梨洲から見れば、「陽明子『朱子晚年定論』を為し、或いは早年に出ずる者有り」と雖も、其の大意は則ち灼然として失わず」と（『黄宗羲全集』第4冊、第927頁）。これは陳建の視点とは誓っても両立しないと言うことができ、ゆえに『明儒学案』において陳建の地位は自ずとなくなってしまった。

- 22) 黄宗羲は次のように言う。「茲読先生（秦灯岩を指す）の書に謂えらく、忠憲と文成の学、絲毫も隔てず、姚江の致知の説は、即ち忠憲の格物の説なり。眼を明らかにして之を照らせば、千門万户、鎖鑰 齊しく墮ろし、始めて東林の自ずから真伝 有るを知る」と（『黄宗羲全集』第10冊、第202頁）。そして高攀竜が陽明の学を伝えたと考えている。しかし総じて言えば、東林党の学者が伝承したのはやはり主に朱学であり、王学に対しては部分的な汲み取るものの、批判的立場を採用している。

Concepts of the “Zhejiang School” and Its Genealogy

Author: QIAN Ming

Translator: Hiroko KUME

Abstract

This is a translation of the draft which Professor Qian Ming read at the symposium “Rethinking the History of the Thought of East Zhejiang” held at Kyoto Sangyo University on December 9, 2006. In the first chapter, it classifies various concepts of the “Zhejiang School” which have been used since the Song dynasty, and clarifies the change with the times. Especially it appreciates Liu Linchang’s definition of the “Zhejiang School”, and confirms the varieties among the definitions by comparing it with some definitions. In the second chapter, it traces the descent and analyzes the academic characteristics of the “Zhejiang School”, focusing on the academic trends in the Ming dynasty. It shows that the Yangming School, as the mainstream of the “Zhejiang School”, was the fruit of the highly advanced culture of East Zhejiang, and that East and West Zhejiang generated different currents from each other after the emergence of the Yangming School.

Keywords : Zhejiang School, East Zhejiang, Historical Studies, Learning of the Heart-and-Mind, Yangming School